



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2014/06/03(火)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 149

第27回都道府県対抗ジュニアオールスター大会を終えて

～全国制覇への挑戦～

女子ヘッドコーチ

旭川市立神居東中学校 高島 伸彦

【はじめに】

第27回都道府県対抗ジュニアオールスターバスケットボール大会が平成26年3月28日～30日に東京体育館をメイン会場とし東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県で開催されました。ご存じの通りこの大会は、将来の日本のトッププレーヤーになるであろう優秀な選手が数多く出場している非常にレベルの高い大会です。2020年東京オリンピック開催も決定し、今大会で活躍した選手がそのオリンピックに出場している可能性も大いにあると思われます。その大会に参加する北海道選抜女子チームヘッドコーチを務めさせていただきました。

北村道 Jr 連盟強化委員長からお話をいただいた時、以前ヘッドコーチをさせていただいた時の男子チームがメインコート（決勝戦）で大暴れしていた姿を観客席から複雑な思いを抱いて見ていたことが思い起こされました。さらに昨年女子チームが第3位という素晴らしい成績を上げた直後です。「これはやるしかない！全国制覇しかない！」と思い「北海道のために、全力でやろう！」と決意し、引き受けることとなりました。

以下、「全国制覇への挑戦」を振り返ります。

【選考合宿では】

2013年10月、第1次旭川合宿からこのチームの取組がスタート。この合宿の目的を、

- ①ON・OFF ボール時の1 ON 1 の攻守の能力
- ②OFR・DFR を奪取するための技術の定着度
- ③シュート（ミートも含めて）に関する全般的な能力
- ④瞬間的な判断力・適応能力→そこからつながるパス能力
- ⑤元気のよさ・礼儀・マナーなど、戦う集団の中での態度

を確認する場とする。日頃チームで深く練習していないためか、OFEのOFFボール時の動きについてはかなり苦労していたようだ。その中で「PGがない」、「シュートが上手な選手がない」という2点が印象に残る。

全道新人決戦大会後に行われた第2次札幌合宿。追加選手1名を加え22名の選手で行った。第1次合宿の確認事項をさらに深化させ、12名の選手を選考。上記の不安材料が完全に払拭されたわけではないが、それぞれに個性のある素晴らしい12名となった。

【本戦までの事前準備】

いよいよ12名での「北海道選抜チーム」の活動が本格的にスタート。最初のミーティングの中で、「北海道を代表する」という「責任の大きさ・重さ」について徹底的に確認。選手はなかなか理解できなかつたかもしれないが、このことを伝えなければこの活動はスタートできない。多くの選ばれなかつた選手の思いを忘れることなく、真摯にバスケットボールに向き合う姿勢がこのチームの根幹になると信じ、その後も幾度となく伝えた。

2月14日～16日の東北仙台遠征。東日本選抜中学生バスケットボール大会に参戦。この大会は毎年、今年のチームの力をある程度掌握できる重要な大会と位置づけられている。今年度は事前に2回の練習を行い、「マンツーマンの攻防」をテーマに大会に臨む。戦いの中で、OFEの約束であるOFFボール時の動きが効果的に作用し、多彩なOFEを展開。特にインサイド陣の動きの中からのコンビネーションプレーはこのチームの大きな得点源になると確信をもつことができた。また、確率はともかく積極的にシュートを打つ姿勢も多く見られ、当初の不安は解消されつつあった。さらに失点が40点台ということで、マンツーマンDFEにある程度の計算をすることができたのも収穫であった。しかし「PGがない」というこのチームの不安材料は解消されないままの状態。また、最後まで苦しむことになる「ターンオーバーが多い」という新たな課題も出てきた。

東北遠征の課題解決期間と位置付けた2月下旬から本戦に向けての仕上げの3月中旬までの練習。新たにゾーンDFEの習得にも取り組み、短時間で中身の濃い練習をしなければならない時期。ここまで休みなくハードな日程をこなしてきた選手にも疲労感が色濃く出始めていた。チームの士気も結成当時より落ち始め、いわゆる「スランプ」状態の時期。

しかし、大きな目標に向かう取組の中では、どんなにレベルの高い集団でも必ず陥る状態であるということ、今までの経験から理解していたので、焦ることなく選手を見守り、鼓舞し続けた。また、自分のチームでは絶対に許すことのできない状況が発生してもあえて目をつぶり、チームの雰囲気維持・向上させることを第一に考えて練習に取り組んだ時期であった。しかし、精神論だけでは戦えないし、もちろん勝つこともできない。この苦しい時期だからこそ技術の定着・理解のための練習を徹底した。特にOFEのカッティングに関してはタイミング、コース、カッティング後の身体の動かし方など細かくしつつこく指導、REB&ルーズボール獲得のための球際の争いについても厳しさを追求した。選手同様、スタッフにも苦しい時期であった。

その間、石狩選抜、旭川選抜、旭川明成高校、旭川龍谷高校、旭川藤女子高校、旭川北高校、札幌東商業、札幌選抜などのチームとゲーム。「スランプ」状態の時期に、力強く技術もあるチームと苦しいゲームをこなしてきた。この期間の苦しみは間違いなくこのチームを大きく成長させた。私が特に言い続けたことは、「チームの約束事を実行し続けること」と「コート上では、心も体も瞬時に切り替えること」の2点。

この時期のゲームは「ターンオーバー」の連続。チームOFEスタイルがパスを多用することもあり、特に「パスミス」が頻発する。しかし、そのミスを引きずっていたらゲームにならない。本戦でも十分に考えられる状況なので、とにかく次のプレーに全力を注ぐことを伝えた。私自身は「ターンオーバーの質」を整理し、「してもよいミス」と「してはいけないミス」を選手に伝えた。その結果周りにどう映ったかは分からないが、私の中では徐々に求めていたチームOFE&DFEスタイルに近づいてきている実感があった。

「PGがない」という点もチームの大きな不安材料の一つ。PGというポジションはチーム戦術を理解し「コート上のコーチ」とならなければならない。また、PGの背中を見て他のプレーヤーはDFEを頑張る。確かに育成の難しいポジションであるが、その都度私がイメージすることと選手のイメージすることをすり合わせながら練習に取り組んだ。その結果誰もが納得する素晴らしいPGに成長してくれた。

その後も練習を続け、本戦前最後のゲームが札幌山の手高校。そのゲームでは、OFEではシュートが成立するまでの過程も全員がよく動き、インサイド陣も体を張るなど非常に強い姿を見ることができた。DFEもREB&ルーズボールに体を張り、3Pシュートも抑えるという堅実なものになっていた。上島監督からも「強さがある」と言ってもらい、選手・スタッフ一同、自信を持って本戦に臨む準備ができた。

【本戦では】

ゲーム前に必ず対戦チームのゲームをビデオで分析しイメージをもったが、何より大事なことは相手のことよりも自分たちが今まで練習してきたことをしっかりとやり続けることであることを確認し、ゲームに臨む。本当に苦しいゲームの連続であった。しかし、選手は全くひるむことなく、目標に向かって突き進んだ。これも苦しい「スランプ」を乗り越えたからこそだ。本当に強くなった。準々決勝対東京 A 戦、準決勝対広島戦は本当に苦しい戦いであったが、選手たちは練習でやり続けた OFE のカッティングからのチャンスメイク、粘り強く力強い DFE&REB を表現し続けてくれた。このチームの欠点である「ターンオーバーの多さ」は払拭できなかったが、ミスを恐れずパスを出し、カッティングで走り続ける選手たちを見て、ある意味頼もしく感じた。

決勝戦は対福岡戦。私自身 2007 ジュニアオールスター大会決勝トーナメント 1 回戦で敗れた相手であり、「何としてもリベンジ!!」と強い思いで臨んだ。何よりこのチーム最後の戦い。「全国制覇」という目標を達成させるために全員をコートに立たせ全力で戦った。結果的には、ゲーム立ち上がり 2 分間のターンオーバーからの失点を取り戻すことができず敗れてしまったが、ゲーム全体の内容は決して引けを取らず、選手たちは今までで最高の動きを見せてくれた。

それぞれのゲーム内容の詳細は、本大会 HP にゲームレポートがありますので省かせていただきます。

【終わりに】

チームの目標である「全国制覇」には一步届きませんでしたでしたが、夢であった東京体育館のメインコートに立つことができました。しかし、その「届かなかった一步」が悔しくてたまりません。何が足りなかったのか…。DFE は 6 ゲーム全てマンツーマンで通し、決勝戦以外はすべて失点が 40 点台だったことを考えると十分に機能していたと考えます。OFE スタイルも十分に通用していました。OFF ボールの選手が常にカッティングをし、スペースを有効に作り OFE を展開していました。それは決勝戦後のインタビューでも多くの記者から指摘されたことです。ベスト 4 に勝ち残ったチームの中でも一番選手が動き、多くの OFE バリエーションをもっていたのが北海道でした。では何が足りなかったのか…。やはり「OFE ファンダメンタル」だと感じます。「イージーシュートは確実に決める」「正しい状況判断からのパス技術」などです。その正確さが根底にあれば、全国トップレベルのゲームの中で身に付けた技術・チーム戦術を存分に発揮できるのです。その部分の追求が私自身まだ甘かったのだと感じました。

間違いなく Jr 北海道女子のレベルは全国トップクラスになっています。道 Jr 連盟が地道に取り組んできた「女子チームの強化」に関するさまざまな取組の賜物と考えます。進んできた道は間違いなかったのです。決勝戦後、福岡県選抜女子チームヘッドコーチ山崎先生が私に言いました。「北海道は Jr 連盟の結束力が強いから、チームも強いんですよ」と。

今回の結果はまさに「チーム北海道」の結束力の結果だと感じています。これを自信にすると同時に、奢ることなく謙虚に強化し続ければ間違いなく「全国制覇」を達成できると思います。私もまだまだ頑張りたいと思います。

今回の成果は多くの方々の力がなければ成し遂げることができないものでした。選手を陰で支え励まし、どんな時でも応援し続けてくださった保護者の皆様、選手を快く送り出してくださった各地区 Jr バasketボール連盟・各学校の先生方、練習ゲームを快く引き受けていただいた高校の監督の先生方並びに選手諸君には言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、このような立場を与えてくださった北海道バスケットボール協会・北海道 Jr バasketボール連盟の方々に厚くお礼を申し上げ報告とさせていただきます。